

戦争と記憶のアメリカン・シアター

——兵士の帰還と『兵士の報酬』

山本裕子

[M]emory is not an instrument for exploring the past but its theatre. It is the medium of past experience, as the ground is the medium in which dead cities lie interred.

—Walter Benjamin¹

はじめに——第一次世界大戦と記憶の戦域／舞台

アメリカの集合的記憶において²、第一次世界大戦は、いまだに確固たる地位を占めてはいない。作家トニ・モリスン (Toni Morrison) は、アメリカにおける奴隷制度に関する記憶の不在を指して「国家的記憶喪失」(257)と呼んだが、第一次世界大戦の記憶についても同じことがいえるだろう。マーク・スネルは、アメリカの集合的記憶における大戦記憶の「不在」を、以下のように指摘する。

The problem with the American memory of World War I is that there seems to be none. . . . After World War II and the onset of the Cold War, individual and collective memory of the First World War— at least in the United States—faded, as the nation memorialized and filled its collective memory with the battles and veterans of the Second World War. (Snell xv)

ここでスネルは、集合的記憶における大戦記憶の欠落が、アメリカ独自の現象であることを示唆したうえで、その原因を第二次世界大戦の集合的記憶による大戦記憶の上書きであると論じる。興味深いことに、この第二次世界大

戦による記憶の上書きは、ワシントン特別区のナショナル・モールにも明確に表れている。

国立記念碑や公的追悼行事は、集合的記憶を形成する文化装置である。首都におかれたナショナル・モールこそ、「空間と建築を媒体として国家的記憶が伝達される」(Trout 18) 最たる場所である。モールは、「記憶の場」であると同時に「政治権力の地形」でもあるのだ³。ナショナル・モールにおいてそれぞれの記念碑が占める位置は、その記念する対象がアメリカの集合的記憶に占める場所を示している。ステイヴン・トラウトによれば、戦争記念碑の配置からは、「21世紀初頭の人々の過去百年の武力闘争への反応」が読み取れるのである(Trout 18)。今日のモールにおいて最も来訪者の目をひくのは、リンカーン記念堂とワシントン記念塔との間、モールの中心に位置する第二次世界大戦記念碑である。この記念碑は、「国家記憶のまさに中心、首都に存在する他のどの戦争記念碑も匹敵することのない誇りの座」を占めている⁴。一方、奴隷解放記念碑がモールに存在しないのと同様、第一次世界大戦開戦100年を迎えた今も、そこに大戦記念碑は存在しない⁵。この事実だけをとってみても、アメリカの第一次世界大戦に関する「国家的記憶喪失」が表れているといえるだろう。

しかしながら、この事実は、大戦間アメリカにおいても第一次世界大戦の記念／記憶化(memorialization)の動きが不在であったことを意味するわけではない⁶。1920年代から1930年代にかけてのアメリカでは、今では「忘れられた戦争」と称される大戦を記念／記憶化する動きが活発に起こった。1921年の「無名兵士の墓」(the Tomb of the Unknown Soldier) 建立を筆頭に、アメリカ各地で記念碑が建立されていた。そして、モダニスト作家の手による多くの戦争文学——ジョン・ドス・パソス(John Dos Passos)『三人の兵士』(*Three Soldiers*, 1921)、E・E・カミングス(E. E. Cummings)『巨大な部屋』(*The Enormous Room*, 1922)、F・スコット・フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald)『楽園のこちら側』(*This Side of Paradise*, 1920)・『偉大なるギャッツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)、アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926)・『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1929)、

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) 『兵士の報酬』 (*Soldiers' Pay*, 1926) ・ 『サートリス』 (*Sartoris*, 1929) ——が出版されたのも、同時期である。記念碑の建立と戦争文学の流行が、時期として重なっているのは決して偶然ではない。これらの文化現象には、第一次世界大戦がもたらした〈近代的な死〉に対するアメリカの喪の作業への身振りがみてとれるのである⁷。そして、その国家的メランコリアの発症の契機となったのは、戦後における兵士の帰還であった。

本稿は、1920年代における兵士の帰還——戦没者の本国送還 (repatriation) と兵士の復員 (demobilization) ——というアメリカ独自の社会的文化的状況に注目し、追悼施設「無名兵士の墓」とフォークナーの戦争小説『兵士の報酬』を、第一次世界大戦がもたらした〈近代的な死〉に対する文化的発露として捉える。はじめに、1920年代アメリカにおいて社会現象となっていた本国送還について概括し、無名兵士が戦後社会において果たした象徴的役割について考察する。つづいて、フォークナーの『兵士の報酬』における復員兵ドナルド・マーン (Donald Mahon) の負傷した身体に焦点を定め、彼の帰還が、戦後社会に遅れて訪れた戦争のトラウマの記憶の侵入的想起を具現化していることを明らかにする。1920年代における記念碑の建立と戦争小説の表象を同列に議論の俎上に載せることによって、1920年代のアメリカ的想像力が、第一次世界大戦という歴史的トラウマを強迫的に追悼し続けるメランコリックな欲動を表出させていることを示したい。

1. 死者の帰還——本国送還と「無名兵士の墓」

「トラウマ的出来事の後には、記憶を巡る闘争がある」(Edkins 16) とジェニー・エドキンスが述べるように、第一次世界大戦の後には、記憶の戦争が勃発した。戦場から遠く海を隔てたアメリカでは、海外で没した兵士の遺体を「どこに、どのように埋葬すべきか」という戦没者追悼論争が巻き起こったのである。連日激しい議論が新聞上で繰り広げられ (Budreau 68)、国内は、海外アメリカ墓地建設による埋葬を支持する人々と遺体を送還しての国

内埋葬を希望する人々との間で二分されてしまった⁸。

海外墓地建設を擁護する人々の主張は、主に国家主義者の^{ナショナリスト}観点に基づいていた。その主張においては、「正しい大義」のために命を落とした兵士の遺体は、「世界を救った戦争へのアメリカの貢献を思い起こさせる重要な証拠」(Laderman 49)である。遺体は、個人の尊い犠牲を象徴すると同時に、国家の大戦貢献を体現する公的な存在となる。支持者たちは、海外墓地における白い十字架の墓碑一つ一つが「戦勝記念碑」(monument)となり、総体としてアメリカの戦争貢献と存在価値を未来永劫記念し続けることを願ったのである (Piehler 96)。

一方、遺体の本国送還を望む声は、遺体をできるだけ自宅近くに埋葬して墓参りをしたいという遺族の心情を反映していた。アメリカは、これまでの戦争において本国送還を慣習としており、参戦当初の政府の方針も、戦没者の遺体は遺族のもとに還すというものであった (Laderman 51)。当然今回も送還されるであろうという遺族側の期待もさることながら、ある母親が国務長官ロバート・ランシング (Robert Lansing) に発した言葉——「あなたは息子を私から奪い戦争へ送った。〔中略〕あなたはあなたの義務として息子を私のもとに戻さなければならない」(qtd. in Piehler 96)——に代弁される責務論も、初めて徴兵制度を導入して軍隊を編成した政府にとっては無視できないものだった。さらに、エンバーミングの習慣のないヨーロッパからの遺体運搬に商機をみこんだ近代葬儀産業の組織的な動きも加わり (Piehler 97)、遺体の本国送還を望む声は日増しに大きくなっていった。

陸軍省は、遺体処置に手を貸すというパープル・クロスの申し出は断ったものの (Piehler 94)、埋葬されてから数年たった遺体を掘り返したうえで国境を越えて運搬するには、輸送費がかかるだけでなくフランス政府との国際的協力をとりつける必要もあり (Laderman 49)、本国送還を避けたいのが本音であっただろう⁹。しかしながら、遺族感情と責務論を考慮した陸軍省は、折衷案として遺族に埋葬方法を選ばせることにした。海外アメリカ墓地での再埋葬を選んだのは、25,000の家族であった (James 163)。大半の遺族は本国送還を希望し、戦没者の約70%が遺族のもとへ返還されることとなった (Piehler 97; Zieger 112; James 163)。

本国送還は、1921年から本格的に開始された (Sledge 145, 172)。1921年4月までに14,800体が、1922年の終わりの時点では計45,588体が、遺族のもとに戻された (Budreau 78; Sledge 176)。多くの遺族は、遺体到着までに2年から5年も待たなくてはならなかった (Sledge 150)。1920年代を通して、兵士の遺体はアメリカ本土に送られ続けたのである (James 22)。

この遅れた戦没者の帰還が、戦禍への切実さを欠いていたアメリカ社会に与えた衝撃は想像に難くない。遺体の本国送還を禁じ (Budreau 42; Sledge 204)、検閲によって遺体を人々の視界から抑圧したイギリスとは正反対に (Freedman 16)、アメリカでは、戦中ではなく戦後に、遺体の可視性が飛躍的に高まったのである。「アメリカ大戦期文化において、戦死者は遍在していた」 (Trout 38)。リサ・M・ブドロウによれば、兵士の遺体の本国送還が「触媒」となり、アメリカを大戦記念へと突き動かしたという (Budreau 5)。1920年代における物言わぬ兵士の帰還は、アメリカならではの戦没者追悼を生んだ。

1921年、これまでのアメリカの歴史においては類をみない国家的追悼行事が行われた。休戦記念日11月11日にアーリントン国立墓地にて行われた無名兵士の埋葬儀式である。イギリスとフランスに遅れること一年、この儀式はアメリカにとって非伝統的な追悼である——「任意に選んだ身元不明兵を儀式的な榮譽をもって埋葬するという概念は、1921年のアメリカ人にとって新しいもので外国からの輸入であった」 (Trout 21)。〈近代的な死〉との初めての邂逅は、新しい追悼様式を要請したのである。

この国家追悼行事は、G・カート・ピーラーによれば「大統領や将軍のための葬儀に匹敵する」 (Piehler 118) ほどで、国葬を模したものであった。フランスから帰還した無名兵士の棺は、11月9日に国会議事堂ロタンダ (Capitol Rotunda) に安置され、大統領ウォレン・ハーディング (Warren Harding)、副大統領カルヴィン・クーリッジ (Calvin Coolidge)、下院議長、最高裁判所長官、陸軍長官、海軍長官、司令官ジョン・パーシング (John Pershing) の各々が花輪を供えた。広間は夜中まで公開され、90,000人以上の市民が「弔問」に訪れた。11日、軍隊の護衛をうけた長い「葬列」は、アーリントン国立墓地に向けて出発した。参列者は、大統領、最高裁判所判

事、大臣、国会議員、州知事といった政府の最高権力者たちであった (Piehler 119)。

記念円形劇場 (Memorial Amphitheater) にて行われた埋葬儀式は、「ラジオとして知られる新技術」によって実況中継され (Trout 37)、まさに近代社会の見世物としての演劇性を備えていた。埋葬儀式は、身元特定が不可能な一兵士の「個人的自己を国家的自己に置換すること」を目的としていた。無名兵士が「国家共同体の理想」を体現するためには「等級、人種、社会的地位よりも、匿名性の保証が重要であった」 (Budreau 100) とブドローが指摘するように、無名兵士はアイデンティティを完全に喪失しているからこそ、「国家的な想像力」が投影される象徴となった¹⁰。この国家による舞台は、「ものものしい行列や儀式」によって、無名兵士を国家的主体——「一戦士であり愛国者的アメリカ人」(Trout 109)——として演出したのである。

大戦中期に「事実上の大戦の国家的記念碑」として機能した無名兵士の墓が、高性能爆薬という「近代的武器」による「特定不可能な遺体をおさめた墓」であるという点において、従来の戦争記念碑と全く異なっているというトラウトの指摘は重要である (Trout 21)。この伝統的な「戦勝記念碑」から新奇的な「墓」への転換は、マリタ・スターケンのいう、「記念碑」 (monument) から「慰霊碑」 (memorial) への移行を示している。スターケンは、アーサー・ダント (Arthur Danto) の定式——「記念碑は、記憶すべきものを記念し、始まりの神話を体現する。慰霊碑は、追憶を儀式化し、終わりの現実を記す」 (qtd. in Sturken 47) ——を下敷きに、記念碑においては「勝利」が記念されるのに対し、慰霊碑においては「犠牲になった命」が追憶されることを指摘する (Sturken 47)。無名兵士の墓は、従来の国家自体を記念する戦勝記念碑とは異なり、戦争の犠牲者を追悼する国立慰霊碑なのである¹¹。そして、遺体の消失および粉碎という〈近代的な死〉を、身を以て立証する身体を儀礼的に埋葬することによって、国家は、終わったはずの戦争に「終わりの現実を記」そうとしたのである。

無名兵士の墓は、戦争を直接的に体験しなかった大多数のアメリカ国民にとって、他者の悲劇が上演される舞台であり、他者のトラウマの記憶を安らかに眠らせるための斎場であった。トラウトは、マーク・メイグス (Mark

Meigs) を引いて、無名兵士の埋葬儀式という「市民的見世物」が、ギリシア悲劇における「カタルシス」を観客に与える「舞台」として機能したと指摘する (Trout 129)。このアリストテレスの有名な用語に、ヨゼフ・ブローア (Josef Breuer) とジグムント・フロイト (Sigmund Freud) が『ヒステリーの研究』 (*Studies in Hysteria*) において論じた、抑圧していた記憶を解放することが治療に繋がるというカタルシス効果の意味合いを付け加えても、あながち的外れではないだろう。〈近代的な死〉という悲劇を演じる無名兵士を大々的に埋葬することによって、国家共同体は、これまで抑圧してきた大戦のトラウマ的記憶を安全に想起して忘却しようとしたのである。ゲイリー・レイダーマンは、無名兵士が「嘆き悲しむ社会体のために、代替身体としての国家的任務を遂行した」と論じる (Laderman 53)。だが、無名兵士の身体は、ここでレイダーマンが示唆するように、行方不明者、身元特定不可能な遺体、海外墓地に埋葬された遺体の代わりとなっただけではない¹²。この国家的儀式において、無名兵士の身体は、国家共同体の結末のための贄として捧げられたのである。

「主に本国送還のために、アメリカにおける戦禍の追悼は、他の連合諸国よりもより公的な行事となった」 (Trout 38) と、トラウトが指摘するように、アメリカにおいて戦没者追悼は、個人的行為ではなく公の見世物となった。国家の指導者達が、「この曖昧な戦争へのアメリカ人の疑問、時には罪悪感を払拭」するために、記念碑や儀式を利用したからである (Piehler 93-94)。政府が主導した記念碑建立や追悼儀式には、戦争によって民族的亀裂や政治的立場の違いがあらわになってしまった国家を一致団結させ、「想像の共同体」の結束を強化するねらいがあった (Piehler 93-94; Budreau 25)。その最たるものが「無名兵士の墓」であったのだ。

1920年代における死者の帰還は、アメリカの戦後社会に戦争の「後遺症」 (aftereffects) をもたらした。戦没者の本国送還によって、人々はまともな戦争体験がないままに戦争のトラウマ的影響だけを被ったのである。無名兵士の埋葬という儀式的スペクタクルを見るために大勢の人が押し寄せた事実は、アメリカにおける戦没者追悼の演劇性を示すだけでなく、それだけ多くの人々が、体験していない戦争のトラウマに憑りつかれていたことの証左

である。体験なきトラウマの来襲は、新しい追悼様式を要求し、連邦政府は大戦という歴史的トラウマに決着をつけるための儀式を提供した。無名兵士の儀式が、「アメリカの大戦物語に、威厳ある、厳粛な、相応しい結末」(Slotkin 466)をつけてくれると期待したのである。

しかしながら、大戦間期、無名兵士の墓は、無数の観客の存在によって「対立する意味の見世物」となる¹³。結果、無名兵士は、国家的記憶を体現する存在として供されたにも関わらず、その身元の特定不可能性が示すように、意味の不確定性を体現する存在となるのである。

Instead, the Unknown Soldier would become a powerful, culturally pervasive icon precisely because his meaning was an indeterminate as his identity. Acting independently of any official agenda, he would speak with a chorus of polyphonic voices, each identified with a different version of memory, as American struggled for two decades to make sense of the First World War. (Trout 40)

大戦間期において、無名兵士の身体は「異なる記憶の解釈」が競合する記憶の戦域／舞台となる。なぜなら、抑圧した記憶は、常に「不気味なもの」(the uncanny)として市民社会に回帰してくるからである。埋葬できない大戦のトラウマ的記憶は、1926年に出版された戦争文学のうちにも亡霊のようなその姿を現す。

2. 亡霊の帰還——『兵士の報酬』における復員兵の身体

フォークナーの小説『兵士の報酬』は、死亡したと思われていたアメリカ人英国空軍中尉ドナルド・マーンの予期せぬ帰郷をめぐる群像劇である。ドナルドが「家に帰った」と妻から聞いたロバートは、政府によって遺体が送還されたのだと勘違いする。

‘Well, Robert,’ she began with zest, ‘Donald Mahon came home

today.’

‘Government sent his body back, did they?’

‘No, he came back himself. He got off the train this afternoon.’

‘Eh? Why, but he’s dead.’

‘But he isn’t dead...’¹⁴

作品の時代設定である1919年春の時点では、まだ始まってすらいなかった本国送還は、こうしてフォークナーの時代錯誤アナクロニズムのうちに実体なき姿を垣間見せる。戦争を書くにあたってフォークナーが選択した方法は、ジェニファー・ヘイトックが指摘するように、「戦闘シーンを描写するのではなく、兵士の経験の一部、すなわち帰郷に焦点をあわせること」(Haytock 98)であった。彼女が結論づけるように、作家にとって戦後社会における兵士の復員——「アメリカの家庭への兵士の再編入」——に注目することは、「アメリカ社会への戦争の影響」を考察するためには必要不可欠であった(Haytock 116)。フォークナーのテキストは、負傷復員兵の身体を舞台に、戦争の後遺症を上演する。「死ななかったのよ」というセリフに表現されるように、ドナルドの〈近代的な死〉からの生還は、戦後アメリカにおける大戦という歴史的トラウマの亡霊的な回帰を具現化する。ドナルドの身体は、無名兵士のそれと同様、「異なる記憶の解釈」が競合する記憶の戦域／舞台となるのである。

作品冒頭、架空の劇脚本からの引用であるエピグラフで始まる第一章第一項は、しばしば「笑劇」(farce)と称されるように、作品における兵士の帰還の演劇性を強調する。列車内での元戦闘員と民間人との戯画化されたやり取りは、カメオ的に戦後社会に生じていた国家的亀裂を浮き彫りにする。兵士の犠牲と救出神話を語る帰還兵ヤパンクのセリフ——「わが国のために血と肉を捧げたおれたち」(11)；「あんたの国を救った男たち」(14)——とは対照的に、ある乗客は、「うちの息子は若すぎて軍人になれなかったのよ、ほんとはよかったと思うわ」(17)と言う。戦後社会においては帰還兵が疎外された状況にある。だからこそヤパンクは、祖国アメリカを「外国」(9)とまで言うのである。マーティン・クライスワースは、「ヤパンク」

(Yaphank) という偽名が米軍兵を指す「アメ公」(yanks) という語を想起させると指摘、第一章においては彼が「帰還兵の象徴」としての機能を果たし (Kreiswirth 42-43)、本編となる物語においてはドナルドの帰還が「退役軍人の困難な社会への再編入を縮図的に示す」(Kreiswirth 62) と主張する。しかし、ドナルドの帰還には、より象徴的な寓意が込められている。作品においてドナルドの身体は、「血と肉を捧げた」戦没者の姿と重なるだけでなく荒廃した戦地の風景とも二重写しとなり、その帰還は、大戦のトラウマ的記憶の想起を表象／再現前 (re-present) するのである。そして、町の住民にとってそれは、他者のトラウマ的記憶の侵襲的想起に他ならなかった。『兵士の報酬』は、大戦記憶を国家の物語に編入することの困難さを縮図的に描き出す国家的戯曲なのである。

主要登場人物ドナルドは、『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*) のキャディー・コンプソン (Caddy Compson)、『死の床に横たわりて』(*As I Lay Dying*) のアディー・バンドレン (Addie Bundren)、『アブサロム・アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*) のチャールズ・ボン (Charles Bon) がそうであるように、作品における「不在の中心」である。フランダース上空で敵機に撃ち落とされたドナルドは、額を横切るひどい傷を負い、片手を失っている。寝たきり状態で終日はば無言のまま過ごす彼は、視力もついに完全に失う。加えて、彼は墜落以前の記憶をすべて喪失しており、過去と現在との繋がりが分断された状態にある。いわゆる戦争^{シエルショック}神経症状態にある彼は、身体的にだけでなく精神的にも負傷しているのである。ジェイ・ウィンターの定義によれば、「戦争神経症とは、個人の記憶と自己同一性との繋がりが切断された状態にあること」(Winter 52) である。つまり、身元は明らかであるものの、ドナルドは過去の自分との連続性を完全に喪失している。彼は、個性の失われた空虚な存在であり、ただ他の登場人物を映し出すスクリーンのような存在である。トゥルーディ・テイトが的確に指摘するように、ドナルドは、「他の登場人物たちが恐れや欲望を投影する、語りの中心にある空白」(Tate 125) なのである。

ドナルドの負傷した身体は、「見世物であり空白」である (Tate 125)。とりわけ作品において強調されるドナルドの顔の傷は、ただそれを目にする者

の反応が描写されるのみで、具体的に描写されることはない。結論を先ずれば、町の人々にとってドナルドの負傷した身体は、おぞましい戦禍を想像させる記憶の場であり光景 (site/sight) となる。文字通り戦争の爪痕が残された肉体は、「戦争を思い起こさせる視覚的合図」(Tate 109) であり、近代兵器の持つ殺傷能力の物的証拠でもある。ドナルドの顔の傷跡は、帰還負傷兵の身体がアメリカ社会においてそうであったように、「遠く離れたヨーロッパの戦争の残滓、痕跡」(Tate 127) なのである。

ドナルドの顔の傷跡は、町の住民に好奇心を抱かせる「見世物」(“Show”) (124) となると同時に、目にした者に恐怖と嫌悪感を抱かせる——「彼の顔を見ようと一度はやってくる、それから一目見て吐き気を押さえながら顔をそむけ、二度とは訪ねてこない」(124)。そして、傷を一目見るという儀式を果たした町の人々は、すぐさま彼を忘れ去る。「哀れな男ドナルド・マーンの帰還は『九日間の驚異』さえ作り出せなかった」(123)。町の人々が彼の存在に対して抱いた恐怖と嫌悪感といった不穏な感情は、新聞の「『戦場の英雄帰る』とおきまりの文字」(124) によって一時的に町の集合的言説に回収される。

町の共同墓地に埋葬されるまで、ドナルドは生と死の中間地帯をさまよう亡霊のような存在として居続ける。ドナルドのまわりの人々は、ドナルドを亡霊あるいは死者の蘇りとして扱う。婚約者セスリー (Cecily) の母親ソンドーズ夫人 (Mrs. Saunders) は「半分死んでるかもしれない人」(82) と彼を評し、エミー (Emmy) は心の中で「(あたしのドナルドも、やっぱり戦死したんだ)」(102) と呟き、父親でさえも「(ドナルドはわたしの息子だったのだ、あの子はもう死んでおる)」(152-53) と繰り返す。「負傷したときにこの青年は死んでしまって、その後の彼は新しい人間だ」(97)、「今でも実際は死人と同様」(128) などと、医師によっても彼は死亡判定を受け、ドナルドを診察した医師は、彼のことを、忘れてしまっているが無意識に存在するある心残り——「自分ではもう意識しないが、以前の生活から抱き続けてきたなにか」(128) ——のために現世にとどまっている亡霊であるかのように表現する。その心残りとは、ドナルド自身が抑圧する戦争のトラウマ的記憶なのである。

作品の結末近くにおいて、ドナルドは自身が抑圧していたトラウマ的記憶を取り戻す。彼が再演する「この日」(243)の中では、戦禍は身体的損傷に喩えられる——「前方から右手遠くにかけて、かつてはイーベルの町だったものが、古びた腫物のひび割れたかさぶたのように見えている、そして下方には死に果てえない肉体にできた新しい腫物の跡……」(244；傍点筆者)。彼の負傷した身体は、爆撃によって壊滅した町を、そして彼自身のトラウマ的記憶を、換喩的に表象しているのである。この時、トラウマ的記憶を文字化し、父親にとどかないまでも「あれは、こんなふうに入ったんです」(245)と心の中で証言するドナルドが、トラウマから治癒するのではなく息をひきとるのは、彼自身が戦争のトラウマ的記憶を体現する象徴的存在だからである。

物語は、戦禍の名残を視覚化することにより人々の抑圧的不安をかきたてるドナルドが、死去して埋葬される大団円へと向かう。その立役者となるのが、戦争の熱に浮かされて士官と結婚した結果、戦争未亡人となったマーガレット (Margaret) である。

マーガレットにとって、ドナルドの身体は、追憶と再演の舞台となる。彼女の意識の中で、夫リチャード (Richard “Dick” Powers) とドナルドは同一視される——「パワーズとマーンは彼女の意識の中で混ざり合う」(Kreiswirth 47)。彼女は、クライスワースが指摘するように、ヨーロッパの地面に朽ちていくリチャードの遺体と彼の身体とを重ね合わせる (37)。マーガレットにとってドナルドの身体は、戦死したりチャードの代替身体なのである。彼女がドナルドの帰郷に付き添い、最終的に結婚までするのは、リチャードにしてしまった過去の仕打ちへの代償行為である——「ディクに対して愛を拒絶してしまった彼女がドナルドに転移する感情は、愛というよりは、むしろ罪悪感と責任である」(Haytock 103)。「戦死」した夫に対して生存者罪責感を抱える彼女は、追悼行為を必要とする。彼女は、ドナルドの妻となり彼の葬儀を執り行うことにより、擬似的にリチャードの遺体を埋葬する。そうすることで、彼女は、彼が体験したトラウマの出来事を想像し、それを集合的記憶へと無事に昇華させるのである¹⁵。

マーガレットが執り行う葬儀によって、ドナルドの身体は、町の共同墓地

に「安らかに眠る」(247)。戦後の平穏な共同体をかき乱す大戦のトラウマ的影響は、ドナルドの身体とともに、無事に葬り去られることが示唆される。だが、ドナルドの葬列を見物する町の集合的な声は、葬儀だけでは追悼行為は不十分だと訴える。「町ではドナルド・マーンの記念碑を建てるべきなんだ、そしてそれを左右から支える柱としてマーガレット・マーン・パワーズとジョー・ギリガンの像を立てるのさ」(246)。作品の舞台であるジョージア州チャールズタウンは、どこにでもある南部小都市の一つとして描かれている。「南部一帯に数知れず存在する町と同様」、町の広場には郡役所と楡の木立とベンチが配され(92-93)、南北戦争を記念する南軍兵士像が立っている(93)。ドナルドの父親である牧師が郵便局前で「町の代表的人物たちの塊」に取り囲まれている時、語り手が「これは南部ではどんな小さな町でも起る風景だ、いや、野次馬に関する限り、北部の町でも西部の町でも同じだろう」(92)と述べるように、町の住人は、南部人の典型であり、敷衍してアメリカ人の典型でもある。つまり、チャールズタウンは国家的想像力に満ちた空間なのだ。この町に新たにドナルド、マーガレット、ギリガンという三人の「聖家族」を記念／記憶化する記念碑を建てることは、独立戦争と南北戦争という国家の戦争の歴史物語のうちに大戦を連ね、分裂した国家という家族を象徴的に再統合することを意味する。記念碑は、共同体から疎外された三人の共有記憶を、さらに敷衍して、抑圧された大戦の集合的記憶を、国家の公的記憶に統合させる役割を果たすものなのである。しかしながら、物語の時点において記念碑が建立されることはない。

そして、フォークナーのテキストは、町の集合的言説に回収されない身体がさまよう余地を残している。物語の中盤、「舞台のよう」(163)なヴェランダに浮かび上がるダンス・パーティーの場面は、冒頭の列車内の場面と呼応する、戦後社会の活人画である。「壁の花たち」(163)である復員兵たちは、社会においても周縁に疎外されている。マーガレットによれば、彼らは「まるで地獄ゆきを待っている亡霊みたい」(163)なのである。語り手曰く、「彼らは戦争というものに倦きってしまった社会に残された二日酔い的存在。さまよう哀れな亡霊たちだ」(165)。戦争という悪酒の後遺症——社会にさまようトラウマ的記憶——は、復員兵の姿に憑依して何度でも召還される。

テキストに浮遊する亡霊たちは、抑圧した大戦のトラウマ的記憶は容易には葬り去れないことを証言しているのである。

戦後アメリカ社会においては帰還した負傷兵の姿そのものが、パール・ジェイムズが指摘するように、「戦争の結末の欠落」と「戦争が終わっても、その影響は、いまだに感じられること」を示していた (James 23)。ウィンターは、近代兵器によって外見が損なわれた兵士の身体が、戦争を想起させる「記憶の場」であったと述べ、その記憶の場が「あまりに異常であるがために通常の人々が見ることすら労するもの」であったことを指摘する (Winter 144)。平時の負傷兵は、サーカスの見世物小屋のように、「市民社会における見世物——魅惑であり恐怖でもある光景」(Tate 110)、すなわち「不気味なもの」(Tate 126) なのである。「死ななかつた」ドナルドの帰還は、町の住民にとっては「かつて身近であったが抑圧した何か」(Freud 153)、不安と恐怖をかきたてる〈内なる他者〉の回帰であったのだ¹⁶。

『兵士の報酬』におけるドナルドの帰還は、戦後アメリカに遅れて訪れた戦争のトラウマ的影響を体現する。ドナルドの負傷した身体は、復員兵のそれと同様、競合する大戦のトラウマ的記憶が想起される記憶の戦域／舞台として機能する。共同体の集合的意識にとって、〈近代的な死〉を表象／再現する負傷兵の帰還は、大戦記憶の亡霊的な回帰であった。アメリカ市民を代表する町の住民にとってそれは、直接体験していない出来事の侵入的想起であり、他者のトラウマの来襲であったのだ。彼らは、墓を建立することによって、「不気味なもの」を安全に排除し隔離する道を選んだ。『兵士の報酬』は、テイトが要約するように、「負傷者の存在によって引き起こされた不安、戦争神経症の兵士が制御され、そして彼の身体が市民社会から最終的に取り除かれる過程をたどる」(Tate 127)。より象徴的な解釈においては、それはアメリカの集合的記憶から大戦記憶が最終的に排除される過程をたどるのである。

おわりに——兵士の帰還とアメリカ的想像力

「アメリカ文化における第一次世界大戦の脱中心化され不安定な立場をど

う説明するか」という重要な問いかけに対し、トラウトは「戦争の多義性自体」に帰すると答える。アメリカ国民が感じていた戦争への曖昧な意識は、大戦前期の「追悼行為をより切実にした」のである (Trout 24)。

開戦当初からアメリカの大戦観は両面価値に引き裂かれていた。1915年に最もアメリカで流行していたフレーズは、反戦歌のタイトル「私は息子を兵士に育てなかった」(“I Didn’t Raise My Boy to Be a Soldier”)であったし (Slotkin 25)、時の大統領ウッドロウ・ウィルソン (Woodrow Wilson) は、スローガン「彼は参戦を回避した!」(“He kept us out of war!”)のもと、1916年大統領に再選されていた (Piehler 93)。こうしたアメリカにおける国民感情について、ロバート・H・ズィーガーは、「ヨーロッパ情勢への超然というアメリカの歴史的立場、そして戦争がアメリカには直接的な物理的衝撃を与えなかったという単純な事実が、両面価値と無関心を助長した」(Zieger 14)として、アメリカ国民の大戦に対する心理的距離をモンロー主義と戦地との地理的距離に起因するものとする。しかし、最も大戦への複雑な心情を促進したのは、遅れた参戦であろう。アメリカの実戦期間は一年数か月であり、イギリス、フランス、ドイツと比べると相対的に戦禍が少なかった¹⁷。加えて、安全圏に位置するがゆえに戦争特需の恩恵を享受していた現実が (Zieger 16; Kennedy 139)、罪悪感や後ろめたさを抱える生存者症候群のような兆候をみせることとなったのではないだろうか。

1920年代における兵士の帰還——戦没者の本国送還と兵士の復員——は、直接的に戦争を体験しなかったアメリカ市民に戦争のトラウマの影響をつきつけた。〈近代的な死〉を呼び起こす兵士の帰還は、アメリカの想像力を捉え、新しい追悼様式と文学の流行を生み出した。無名兵士の墓は、個人的記憶が集会的記憶へと置換される国家的舞台となった。だが、同時に、このアイデンティティのない「空白」は、常に絶え間ない上書きにさらされていた。同様に、『兵士の報酬』におけるドナルドの身体は、抑圧した大戦のトラウマ的記憶が回帰する記憶の戦域／舞台として機能する。無名兵士とドナルドの身体は、ともに歴史的トラウマが上演される記憶の舞台となったにもかかわらず、競合するトラウマ的記憶が際限なく想起される記憶の戦域となったのである。戦後アメリカへの無名兵士の帰還と戦争小説におけるドナルドの

それは、アメリカ的想像力の否定と是認の狭間から生じた「不気味なもの」——〈近代的な死〉——の回帰であったのだ。20世紀最初の世界大戦がもたらした〈近代的な死〉を抑圧したアメリカ的想像力は、戦後になってから、遅れて帰還した「不気味なもの」と対峙した。大戦間アメリカにおいて記念碑建立と戦争文学の流行を要請した追悼気運の高まりは、第一次世界大戦という歴史的出来事のトラウマ的影響力の大きさを物語っている。

「戦闘と同じくらい重要なのは、アメリカ人が特定の戦争経験を国家的意識と文化に同化してきたかということである。アメリカの国家的アイデンティティは、過去の戦争に対する記念と記憶と分かちがたく絡み合っている」(Piehler 3)とG・カート・ピーラーは指摘する。しばしば、第一次世界大戦がアメリカにおいて「忘れられた戦争」と称されるのは、この戦争が、国家の自己定義に含まれていないからである。戦後、想像の共同体たる国家の結末は、戦没者と復員兵を犠牲にすることによって成し遂げられた。それは、初めての国家総力戦 (total war) と言われる大戦がアメリカにとってはそうではなかったのだから、当然の帰結といえるかもしれない。大戦間期のアメリカ的意識と文化は、戦争を直接的に体験しなかった世代が戦争体験者を疎外することによって形づくられたのである¹⁸。

しかしながら、〈近代的な死〉は様々なものに憑依して「不気味なもの」として常に回帰する。その幾度、自らの喪失したものがわからない国家は、メランコリアに罹患したまま喪の身振りを強迫的に続けるのだ¹⁹。それこそが第一次世界大戦の後遺症であるとは気づかぬままに。アメリカ的想像力は、集合的記憶のうちにある欠落を埋めるために、失われた大戦記憶を求めて反復的に亡霊を召還し続けることだろう。

註

本稿は2014年12月22日に開催された日本英文学会関西支部大会(於立命館大学)の英米部門シンポジウムにおける口頭発表に大幅な加筆・修正を施したものである。

1. Benjamin 314.

2. 本稿では、「集合的記憶」(collective memory)を、追憶の様々な形態を通して直接的あるいは間接的に想起される、あるいは創造される、ある集団に共有される記憶を指して用いる。同様の現象を指す語として、「文化的記憶」(cultural memory) (Sturken)、「集合的追憶」(collective remembrance) (Winter and Sivan)、「公的記憶」(public memory) (Bodnar)、「神話」(myth) (Hynes) が用いられるが、本稿では、「人々は個人的に経験したことではないことも覚えている」という「現象の複雑性と力」(Trout 13)を捉えた用語として、集合的記憶という語を使用する。モーリス・アルヴェックスの古典的な定義によれば、個人的記憶と集合的記憶は二項対立的に峻別されるものではない。想起する主体である個人が記憶を獲得するのが社会的集団においてである以上、記憶は集団のなかで社会的に構築される。記憶を思い出す行為自体が、集団の視点や社会的枠組を一時的に適用し、集合的記憶のうちに記憶を位置づけ、参入することなのである。つまり、集合的記憶とは、個人の記憶が生成するための参照枠である (Halbwachs 38)。ここでは、この記憶生成の社会構築性に加えて、記憶が共有されることによる共同体生成の作用についても強調しておきたい。
3. Edkins 216; アメリカにおける記念碑の政治性に関する研究は、他に Mayo; Bodnar; Snell; Trout; Budreau が挙げられる。
4. Trout 18; 2004年に除幕式がおこなわれたばかりの記念碑は、その新しさによって、第二次世界大戦の記念/記憶化が決して平坦な道程ではなかったことも同時に示している。アメリカの集合的記憶における第二次世界大戦の中心化は、本稿で扱う範囲を超えている。ここでは、その現象が、1993年のワシントンD.C.のアメリカ・ホロコースト記念館 (the United States Holocaust Memorial Museum) と1995年ボストンのフリーダム・トレイル (Freedom Trail) に完成したニューイングランド・ホロコースト記念碑 (the New England Holocaust Memorial) に代表されるように、「ホロコーストのアメリカ化」(the Americanization of the Holocaust) と連動していると示唆するに留めたい。ホロコーストのアメリカ化については、Young; Rosenfeld; Novick; Flanzbaum を参照されたい。
5. 21世紀に入り、奴隷制度と第一次世界大戦にも、一定の公的記憶が形成されつつあるのかもしれない。2016年、ナショナル・モールのワシントン記念塔の隣接地にて、国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館 (the National Museum of African American History and Culture) が開館予定である

（“About Us”）。ミズーリ州カンザスシティでは、1926年に大々的な除幕式が行われた「自由記念碑」(Liberty Memorial)が、1994年の建物老朽化による閉館を経て、2006年、国立第一次世界大戦博物館（The National World War I Museum and Memorial）として拡張再生を遂げた（“Museum and Memorial”）。後者についてトラウトは、中心のワシントンではなく中西部の一都市が国家追悼の中心地であることに、アメリカにおける第一次世界大戦の「脱中心化され不安的な地位」（Trout 22）を見出す。

6. アメリカにおける第一次世界大戦の歴史と記憶に注目した研究としては、既に3で挙げたものに加えて、Sledge; Zieger; Kennedy; Piehler等が挙げられる。
7. 第一次世界大戦においては、大砲、機関銃、手榴弾、飛行機、戦車、毒ガスといった近代兵器が導入された。ここで言う〈近代的な死〉とは、第一次世界大戦時の兵士が最も恐れた死の形態、すなわち、大量破壊兵器によって身体が溶解・粉砕するなどして身体が「完全消滅」(total disappearance) (James 4) することである。死の瞬間を目撃されることもなく遺体も後に残らない、存在が消される全く新しい死のあり様を指す。モダニズム文学と〈近代的な死〉の関連についての議論は、上述引用のJamesに加えて、Tate; Booth; Cole; Freedman; Haytockが興味深い。
8. Piehler 94; Laderman 48; Budreau 15; James 163を参照した。
9. 本国送還の遅れは、一般的には遺体の送還を禁じたフランス政府の方針によるものとされているが、1920年9月15日以降は許可するというフランス政府の方針転換の後も（Sledge 144）、本国送還は直ぐには開始されなかった。ブドローが推測するように、アメリカ陸軍省にも責任の一端があったのかもしれない（Budreau 40）。
10. Anderson 9; ベネディクト・アンダーソンは、イギリスのホワイトウォールの戦没者記念碑（the Cenotaph）やウエストミンスター・アビーの無名戦士の墓（the Tomb of the Unknown Warrior）が、その遺体の「不在」や「匿名性」によってこそ、ナショナリズムが充満する記念碑となることを指摘する（9）。サミュエル・ハインズは、両記念碑が、一方は遺体が安置されておらず、一方は身元不明者の遺体であることから、そこに戦争の実相にちかづく象徴性を見出すことができると主張する（Hynes 281）。
11. この無名兵士の墓に代表される戦没者追悼は、ジョージ・L・モス（George L. Mosse）の言う、ヨーロッパおよびアメリカの戦後文化を特徴づける「戦

- 没者カルト」(the cult of the fallen) を映している。戦後文化において、戦死した兵士は、個でありながらも個人的自己を奪われた集合的存在、「市民による保存と名誉を受ける価値のある、国家的自己を体現するカルト的な姿」(Budreau 14) へと変貌を遂げたのである。
12. ブドローによれば、アメリカ人兵士の「行方不明者」(missing) あるいは「身元特定不可能」(unknown) は、約4,500名であった (15)。
 13. Trout 109; 米国在郷軍人会によれば、1937年だけで1,586,086人の訪問があったという (Trout 20)。
 14. Faulkner, *Soldiers' Pay* 80-81; 本書からの引用は、以下、本文の括弧内に頁数のみを記す。なお、引用の日本語訳は、加島祥造訳『兵士の報酬』に従った。
 15. マーガレット以外に、他者のトラウマ的記憶を共有するのは、戦場でパニックになったデューイ・バーニー (Dewey Barney) が、至近距離から上官リチャードの顔面を撃って殺害する場面を目撃した元兵士マドン (Madden) である。リチャードのトラウマ的体験は、目撃者マドンの記憶のうちで繰り返し断片的に再演され、テキストに散発的に浮上する。
 16. 1919年に発表された論考「不気味なもの」("The Uncanny") に大戦の影響をみることは容易いだろう。フロイトによれば、「不気味なもの」として知覚される感覚の正体は、「実は新しくも未知のものでもなく、長らく精神には身近であるのに抑圧によってそこから疎外されただけの何か」(148)、「かつて良く知られていて、ずっと身近なものであったものまで遡る、あの怖さの類」(124)、すなわち幼少期に抑圧した恐怖の感覚である。そして、その感覚は「我々が今まで想像だと考えていた何かの現実と直面したとき」(150) を契機として呼び覚まされ、この抑圧的記憶の回帰は「不気味なもの」として知覚される。「不気味なもの」とは、抑圧した〈内なる他者〉の存在を否定すると同時に是認する心の葛藤から立ち現れる感覚なのである。
 17. 米軍の死者は約60,000人、負傷者は約206,000人。五月下旬から休戦まで、一日平均300人の米兵が戦闘で命を落とした。加えて、流行性感冒によって約60,000人の軍関係者が死亡した (Zieger 108)。ブドローによれば、米軍の戦没者80,178人に対し、英軍は1919年までに722,785人の死者をだした (Budreau 19)。リチャード・スロトキンとデヴィッド・ケネディーは、こうした事情から大戦がアメリカにとってトラウマではなかったと示唆する (Slotkin 464; Kennedy 138-39)。
 18. 戦争文学の特徴が、イギリスでは戦争の現実への忠誠に、アメリカでは戦争

による精神的影響の探究にあることは、こうしたアメリカ的文脈から理解できる。

19. フロイトは、「喪とメランコリア」(“Mourning and Melancholia,” 1917)において、メランコリアとは、「何らかの喪失は経験されるが、何を喪失したのかわからない」という「対象愛の無意識的な喪失」によるものであると論じる (Freud 166)。

(引用文献)

- “About Us.” The National Museum of African American History and Culture. Web. 10 August 2015.
- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. 1983. London: Verso, 2006. Print.
- Benjamin, Walter. “A Berlin Chronicle.” *One-Way Street and Other Writings*. Trans. Edmund Jephcott and Kingsley Shorter. London: Verso, 1997. Print.
- Bodnar, John. *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century*. Princeton: Princeton UP, 1992. Print.
- Booth, Allyson. *Postcards from the Trenches: Negotiating the Space between Modernism and the First World War*. New York: Oxford UP, 1996. Print.
- Breuer, Josef and Sigmund Freud. *Studies on Hysteria*. Trans. James Strachey. London: Hogarth Press, 1955. Print.
- Budreau, Lisa M. *Bodies of War: World War I and the Politics of Commemoration in America, 1919–1933*. New York: New York UP, 2010. Print.
- Cole, Sarah. *Modernism, Male Friendship, and the First World War*. Cambridge: Cambridge UP, 2003. Print.
- Edkins, Jenny. *Trauma and the Memory of Politics*. Cambridge: Cambridge UP, 2003. Print.
- Faulkner, William. *Soldiers’ Pay*. London: Vintage, 2000. Print.

- Flanzbaum, Hilene, ed. *The Americanization of the Holocaust*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1999. Print.
- Freedman, Ariela. *Death, Men, and Modernism*. London: Routledge, 2003. Print.
- Freud, Sigmund. "Mourning and Melancholia." *General Psychological Theory: Papers on Metapsychology*. Ed. Philip Rieff. Trans. Joan Riviere. New York: Collier Books, 1963. 164-79. Print.
- . *The Uncanny*. Trans. David McIlintock. London: Penguin Books, 2003. Print.
- Halbwachs, Maurice. *On Collective Memory*. Trans. Lewis A. Coser. Chicago: U of Chicago P, 1992. Print.
- Haytock, Jennifer. *At Home, At War: Domesticity and World War I in American Literature*. Columbus: Ohio State UP, 2003. Print.
- Hynes, Samuel. *A War Imagined: The First World War and English Culture*. London: Pimlico, 1990. Print.
- James, Pearl. *The New Death: American Modernism and World War I*. Charlottesville: U of Virginia P, 2013. Print.
- Kennedy, David M. *Over Here: The First World War and American Society*. New York: Oxford UP, 2004. Print.
- Kreiswirth, Martin. *William Faulkner: The Making of a Novelist*. Athens: U of Georgia P, 1983. Print.
- Laderman, Gary. *Rest in Peace: A Cultural History of Death and the Funeral Home in Twentieth-Century America*. New York: Oxford UP, 2003. Print.
- Mayo, James M. *War Memorials as Political Landscape: The American Experience and Beyond*. New York: Praeger, 1988. Print.
- Morrison, Toni. "The Pain of Being Black: An Interview with Toni Morrison." *Conversations with Toni Morrison*. Ed. Danille Taylor-Guthrie. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 255-61. Print.
- Mosse, George L. *Fallen Soldiers: Reshaping the Memory of the World Wars*. New York: Oxford UP, 1990. Print.
- "Museum and Memorial: Built By Kansas Citians, Embraced By the Nation." *The National World War I Museum at Liberty Memorial*

- National World War I Museum and Memorial. Web. 23 September 2015.
- Novick, Peter. *The Holocaust in American Life*. Boston: Houghton Mifflin, 1999. Print.
- Piehler, G Kurt. *Remembering War the American Way*. Washington, D.C.: Smithsonian, 1995. Print.
- Rosenfeld, Alvin H. "The Americanization of the Holocaust." *Thinking about the Holocaust: After Half a Century*. Ed. Alvin Rosenfeld. Bloomington: Indiana UP, 1997. 119-50. Print.
- Sledge, Michael. *Soldier Dead: How We Recover, Identify, Bury, and Honor Our Military Fallen*. New York: Columbia UP, 2005. Print.
- Slotkin, Richard. *Lost Battalions: The Great War and the Crisis of American Nationality*. New York: Henry Holt, 2005. Print.
- Sturken, Marita. *Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*. Berkeley: U of California P, 1997. Print.
- Snell, Mark A., ed. *Unknown Soldiers: The American Expeditionary Force in Memory and Remembrance*. Kent, OH: Kent State UP, 2008. Print.
- Tate, Trudi. *Modernism, History and the First World War*. Manchester: Manchester UP, 1998. Print.
- Trout, Steven. *On the Battlefield of Memory: The First World War and American Remembrance, 1919-1941*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2010. Print.
- Winter, Jay. *Remembering War: The Great War and Historical Memory in the Twentieth Century*. New Haven, CT: Yale UP, 2006. Print.
- Winter, Jay and Emmanuel Sivan, eds. *War and Remembrance in the Twentieth Century*. Cambridge: Cambridge UP, 1999. Print.
- Young, James E. *The Texture of Memory: Holocaust Memorials and Meaning*. New Haven, CT: Yale UP, 1993. Print.
- Zieger, Robert H. *America's Great War: World War I and the American Experience*. New York: Rowman and Littlefield, 2000. Print.
- フォークナー, ウィリアム. 加島祥造訳. 東京: 文遊社, 2013. Print.